

英単語教育における高校生の学習方略の導入に関する研究

下地 貴樹*・丸山 広人**

(2009年9月15日受理)

Research on introduction of high school student in English word learning

Takaki SHIMOJI and Hiroto MARUYAMA

キーワード: 学習方略, 英単語学習, 高校

高校生の学習意欲の上昇を促すための方法の一つとして、学習方略に着目した。個人指導形式での学習指導、そのなかでの方略導入による意欲の上昇を測定した。その結果、学習方略のうち、精緻化方略、体制化方略の導入は学習意欲の上昇に効果があった。

問題と目的

学習場面において、学習方略を効果的に使用できる学習者ほど学業成績のみならず、学習意欲も高い。これは Palmer(1988)が帰属理論の観点から、Bandura(1977)が自己効力感理論によってそれぞれ明らかにしている。

彼らの意欲が高い理由は、問題を発見し解決する方法を知っているからである。学習方略を効果的に使用できないものは、学習をこなす知識を習得しても意欲は上がらない。そこで「効果的な学習方略の教授を行えば、学習意欲は上昇する」という考えから「方略を教授されることで学習意欲が高まる」という研究も近年行われている(岡田, 2007)。

岡田(2005)の研究では、学習方略の介入により、方略志向の高低や英単語に対する重要性の認知にかかわらず学習意欲が高まったことが確認された。

学習方略を教授されることで、どうして学習意欲の上昇に効果を及ぼすのか。

それには、Atkinson(1957)の期待-価値モデルや Bandura(1982)の効力期待など動機づけ理論における「期待」という概念が大きく関わっていると考えられた。このような理論的枠組みに照らして岡田(2007)は、期待とはこれからの学習に関する「見通し」がたつことにより生じるものであり、

* 九州大学人間環境学府研究生 ** 茨城大学教育学部

方略を学ぶことにより見通しを立てることが出来るようになり、学習意欲が高まると考えた。

岡田(2007)がその研究に用いた主な方略は、体制化方略であった。これは事前調査において、体制化方略とイメージ化方略の二つの方略を使用している生徒ほど積極的に学習に取り組んでいるという結果が出たこと、これらの方略の使用者が少なかったこと、英単語学習の際の体制化方略の有効性が主張されていたこと、があったためである。調査の結果、体制化方略を用いた方略指導によって、生徒の学習意欲は上昇し、さらに、英単語を学習することが重要だと思っていなくとも、英単語学習に意欲を持ったということが明らかとなった。一方、この方法が必ずしも全ての学習者に有効だとはいえない可能性も指摘されている。市川(1998)は、知識の関連づけについて、予備的知識の十分でない学習者にとって、方略の利用はかなり難しいことであると述べている。体制化するための学習能力が、接頭辞、接尾辞、語幹の理解まで届いていなかったり、新しい情報に対しての取り組みに不慣れであったりすると、方略があるということは解っても、使用まではできないということが予想される。

体制化方略だけでは、現場の様々な生徒に対応することはできない。そうであるならば、体制化方略ではない方略を利用することで解決できないだろうか。岡田(2007)の研究では、体制化方略に重点を置いた研究であったが、積極的な学習を行う生徒が用いた方略には他にイメージ化方略があった。そこで、イメージ化方略を教授することで学習意欲の上昇をうながすことを試みたい。

イメージ化方略は、精緻化方略と呼ばれる方略の一つである。イメージ化には誘導イメージ化と強制イメージ化があり、Reese(1976)はその効果を比較した。誘導イメージ化は、学習者に項目を連合するための効果的イメージをつくらせ、それをを用いるように教示するものである。強制イメージ化は実験者があらかじめ教授者に一定のイメージを与え、学習者にそれをを用いるように強制する場合である。この研究によると、強制イメージ化は幼稚園児と小学1年生の対連合学習を助けたが、誘導イメージ化は6年生と大人の学習に効果があった。これは、次のことを示している。年少児ではまだ効果的なイメージをつくることできないが、与えられたイメージを用いることはできる。これに対して、自分で自分に適したイメージをつくることのできる小学校6年生は、教師のイメージ提示によってかえってその過程が妨げられてしまう可能性がある。

また、イメージ化方略の有効性が見られたというのなら、他の精緻化方略はどうであろうか。受験用の参考書や問題集などには、語呂合わせやマンガで覚える英単語といったイメージを与えることで理解を促進させるものも多く見られる。これらの効果は数多く、英単語のみならず、英語学習としての理解にも役立つ。例えば、語呂合わせの学習方法は、時間が経過してからの記憶の定着率という点で他の学習法より優れている。語呂合わせのための文章が意味を持ち、学習者にイメージを与えやすいなどの利点がある。さらに、こういった語呂を自分でつくることは、自分にあったイメージを生み出し、学習に取り組むという過程を経るため連合しやすい。これは優れた誘導イメージを使った学習といえるだろう。

強制イメージは、年少児向けだということを上述したが、学習者が興味を持ち、イメージを容易に得るような教材を使ってイメージを与えるなら、それは年少児、年長児、大人を問わず効果があるはずである。その例として英語マンガがある。英語マンガで英語を学習するには3つのメリットがある。まず、ストーリーを楽しみながら続けられることである。英語マンガは、日本で刊行された作品の英訳版であり、学習者が読んだことのある作品、興味のある作品を楽しむことができる。

次に、言葉のニュアンスが学べることである。マンガは、その絵によって登場人物の気持ちや心理状態まで分かり、英語の習慣にも馴染むことができるようになる。つまり、コマの流れの中でセリフの英語表現の中に含まれるニュアンスまで分かるようになるということである。最後のメリットは、一文一文が短いので会話に応用が利くということである。一般の小説や文章では、設定や状況、心理描写を全て文字で説明する必要があるため、どうしても記述の英文量が多くなる。しかし、英語のマンガでは、状況説明は絵で補えるので、1冊6000語程度の小学校低学年向けの読み物くらいの単語数でありながら、十分に深い内容が表現されている。つまり、英会話力を伸ばしたい人に適した読書素材といえるだろう。

Pintrich, Smith, Garcia & Mckeachie(1993)や Wolters(1998)の研究では、学業成績と学習方略の関連を測り、そこに正の相関が見られることを明らかにした。なかでも、精緻化方略が他の方略に比べて、学業成績との相関が高いことが見られる。

表1 学習方略と学業成績との関連

| 研究者 | 年代 | 対象 | 使用方略 | 学業成績との相関 | 対象の学業成績 |
|------------------------------------|------|-----|--|---|---------|
| Pintrich ,Smith ,Garcia&Mckea chie | 1993 | 大学生 | リハーサル 精緻化 体制化 メタ認知的自己調整 時間・学習環境の管理 | r=.05 r=.22* r=.17* r=.30* r=.28* | 学年末の成績 |
| Wolters | 1998 | 大学生 | リハーサル 体制化 精緻化 メタ認知的方略 | r=.03 r=.17** r=.31** r=.24** | 学年末の成績 |

* p<.05 **:p<.01

以上のことから、高校生の学習に対してイメージ化方略を含む精緻化方略は有効であろう。

方法

仮説

イメージ化方略、体制化方略を含む学習方略を導入することは学習者の学習意欲を上昇させることに適している。それは、他者から教授されても意欲の上昇がみられる。

1. 実施内容

本研究では、個人指導形式での方略指導を行なった。週に1回、指導時間を1時間程度とした計8回の授業と、指導に入る前の事前調査として、生徒と個別面談をして学習方略の研究であることを知らせた。この事前調査を第0回とした全9回の指導である。それぞれの生徒には、毎回の指導終了後に、質問紙を実施した。

2. 尺度

使用した質問紙は Schmeck(1977)らの作成した「学習過程調査票」、谷島・新井(1994)の作成した「学習目標志向尺度」である。

「学習過程調査票」は、学習の際に示す手続きを調査するものであり、次の4つの下位尺度からなる。①学習教材の有意なまとまり（体制的特性）に注意する能力や、それらを再体制化する能力を「総合・分析」、②組織的・伝統的な学習技術を用いる程度を「勉強法」、③法則や一般化の仕方を記憶する能力ではなく、細かい事実に知識を記憶・保持する能力を「事実記憶」、④情報をイメージ・媒介・実例などに置き換え、自分の体制的な枠組みの中に取り入れて適合させる程度を「精緻化」の4つの観点から、望ましい学習過程をとっているかを調べる。この尺度を学習方略導入前に調査することで、その生徒がどのような学習方略を用いているかを判断することが出来る。

「学習目標志向尺度」は、学習意欲を測定するために用いる尺度である。学習意欲を目標志向として捉え、次の4つの下位尺度からなる。①課題内容を理解すること、課題そのものへの追求を目指す傾向である「課題志向」、②自己の向上、自己への挑戦のための学習を目指す傾向である「自己志向」、③友達との励まし合いや、助け合いを重視する親和的傾向である「協同志向」、④周りと競い合うことにより、切磋琢磨していこうとする傾向である「競争志向」である。この尺度の特徴は、学習に対して促進する志向に関しての目標志向を測定していることである。よって、この尺度を用いることにより、学習者の学習意欲を類推することができる。

3. 対象者

沖縄県内の高校2年生4名、高校1年生2名 6名とも男子（6名とも筆者が高校生水準とされる英語検定準2級の問題にもとづいて作成した英単語テストでは3割程度の成績であった）。方略の教授は、生徒6名を2グループに分けて行った。実験群1として、生徒3名には8回全ての指導において学習方略の指導を行った。実験群2には、指導開始から4回目までは生徒の通常時の学習と同じように学習してもらい（方略の教授はしない）、後半4回に学習方略を指導した。これは、学習方略の教授、修得によって意欲が上昇したということを知るためである。

4. 指導内容

本研究で教授する方略は精緻化方略、体制化方略が主となる。精緻化方略の指導には、単語を使った語呂合わせや身近な和製英語を用いた指導を中心に行った。また、英語マンガを使ってイメージをつくることを教えた。体制化方略の教授には、岡田が行ったように単語の構成を体制化できるように接頭辞・接尾辞・語幹に別れることを教え、生徒に教材としてそれらのリストを渡し、学習の一助とする。その一例を紹介する。

体制化方略

destruction(破壊) de(離れて)+struct(積む)+ion(→名詞)=積んでる物をバラバラにする→破壊

competition(競争) com(ともに)+pet(求める)+ion(→名詞)=一緒に求める=競争

※接頭辞・接尾辞のリストを制作し、単語意味推測の手がかりとする。

精緻化方略

キーワード法 (イメージ)

sober(まじめな) 覚え方: **そば** (sober) にいたいのはまじめな人

melt(溶ける) 覚え方: アイスは、**なめると** (melt) 溶ける

その他、イラストを用いたキーワード法や英語漫画などの台詞を利用する。

授業はまず、単語テスト形式で単語の意味を答えさせる。その単語について答えられた単語、答えられなかった単語にかかわらず学習方略を教授して学習させる。実験としての授業内容はほぼ全てが方略の教授という形で進み、最後に確認として単語をチェックする。そして、次の指導の際、開始時に同じテストを受けてもらう。テスト終了時にどの方略が向いていると思ったかなどを質問する。

結果

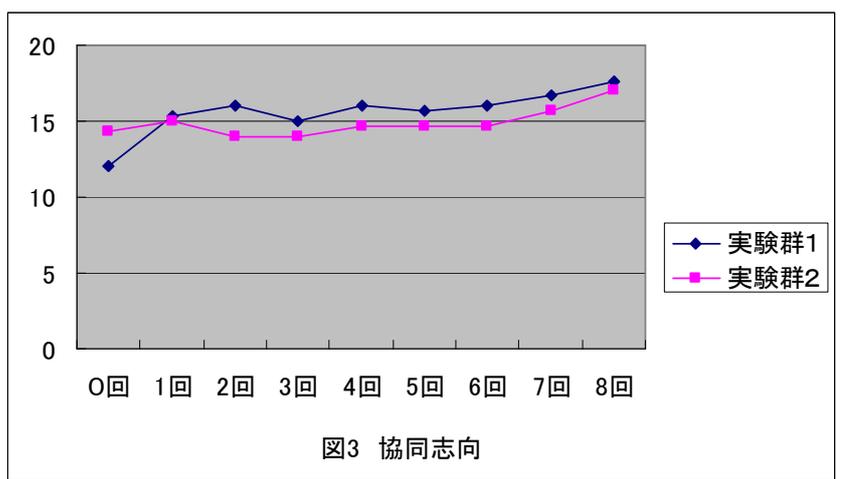
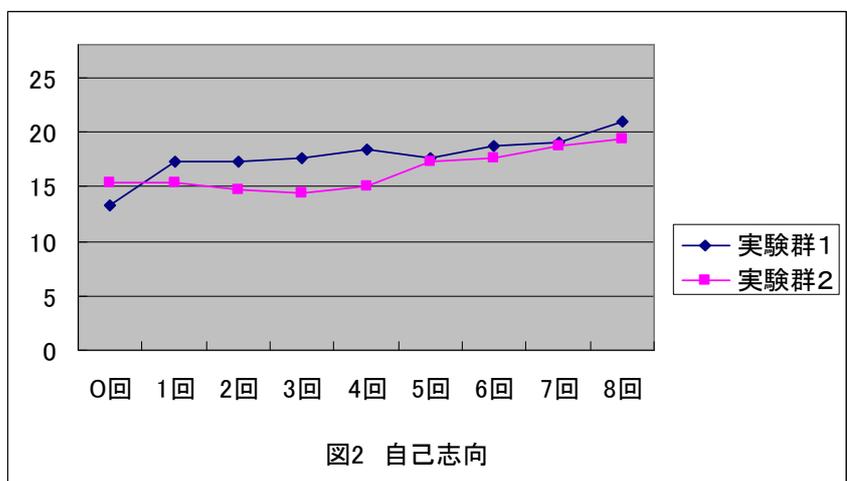
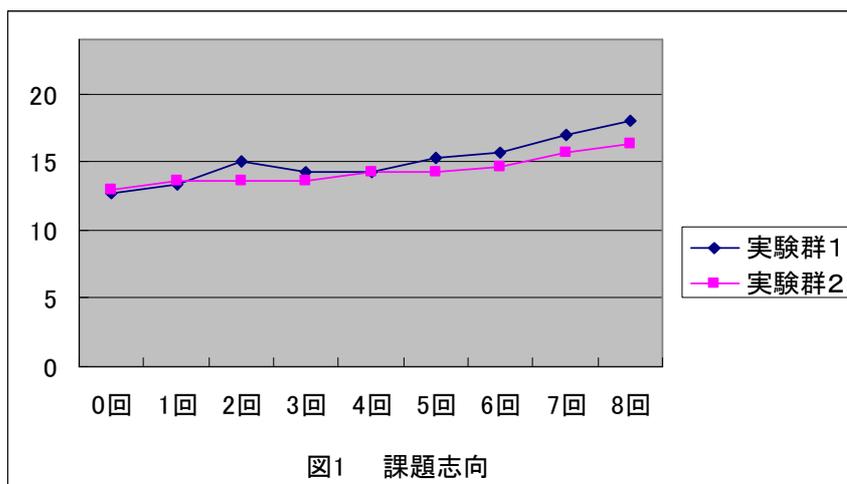
1. 学習目標志向測度から見る意欲の変化

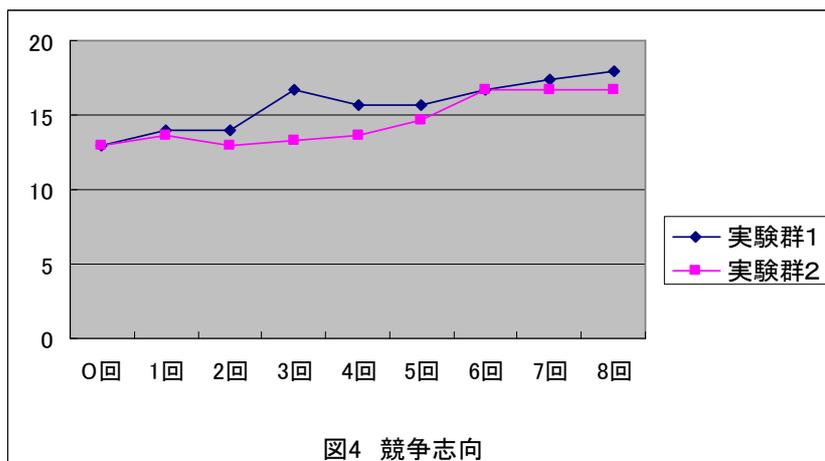
学習目標志向測度におけるそれぞれの下位尺度の結果は、図1から図4に示した。なお、採点方法は下位尺度ごとに4件法の数値をそのまま得点化して、それぞれの合計を算出している（課題志向：6項目・24点満点、自己志向：7項目・28点満点、協同志向：5項目・20点満点、競争志向：5項目・20点満点）。

各志向性の実験群1、2を比較すると、第1回の指導から学習方略を導入した実験群1は、第1回の指導後から志向性の上昇を見せ、第5回から学習方略の指導を行った実験群2の志向性は第5回後からの上昇を見せている。このことから学習方略の導入が、学習意欲の上昇に影響を与えるということが分かった。

また、各志向性の比較では「自己志向」という点から上昇を見せた。それに比べて、「課題志向」「協同志向」「競争志向」の点では上昇は見られるものの自己志向のような急激な変化はみられなかった。課題志向のグラフ（図1）を見ると、方略の教授が影響を与えているのか分からない。徐々に伸びているようにも思うが、実験群2の伸びと差がない。それと比較

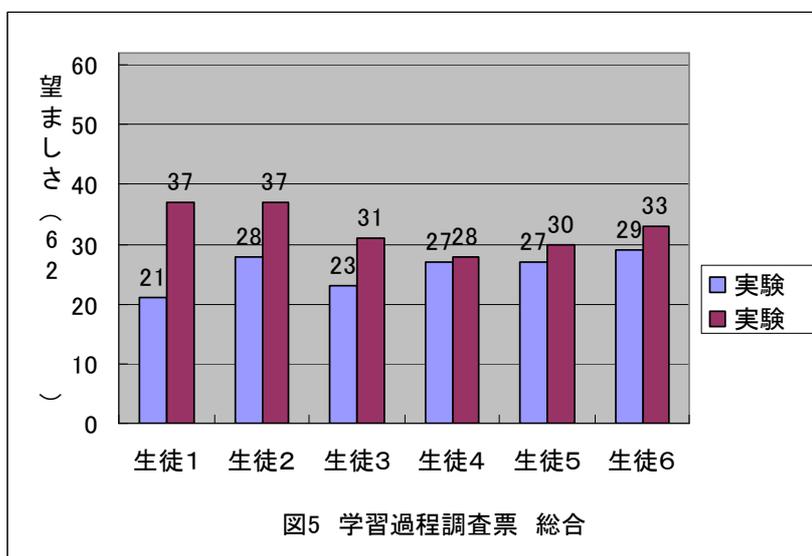
して自己志向（図2）においては、方略を教授したその回から意欲が伸びている。協同志向（図3）では、実験群1が方略の教授に対して大きく反応しているが実験群2の方を見ると反応が弱い。競争志向（図4）の伸びを見ると、方略を教授してすぐではないが、反応がある。このように各志向性によって上昇に差異があるが、学習方略を教授することでどの志向性も上昇したことが分かる。特に自己志向において結果が明らかとなったが、これは「自己の向上、自己への挑戦のための学習を目指す傾向」である。生徒はもともと学習への興味が無かったのではなく、学習の方法が掴めていなかったのではないか。そこへ、学習方法を教授されたことで意欲が急激に刺激され、学習の楽しさ、自身の勉強方法の欠点に気づくことが出来たのではないだろうか。自己志向が最初に上昇し、それに次いで他の志向も上昇していくのではないだろうか。

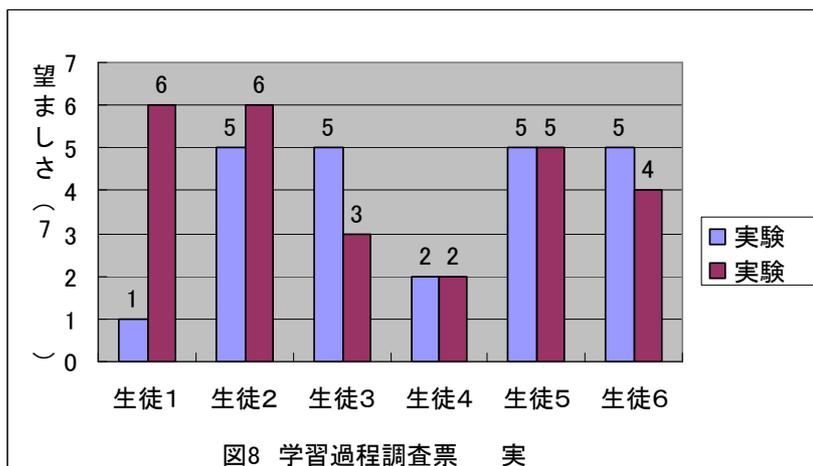
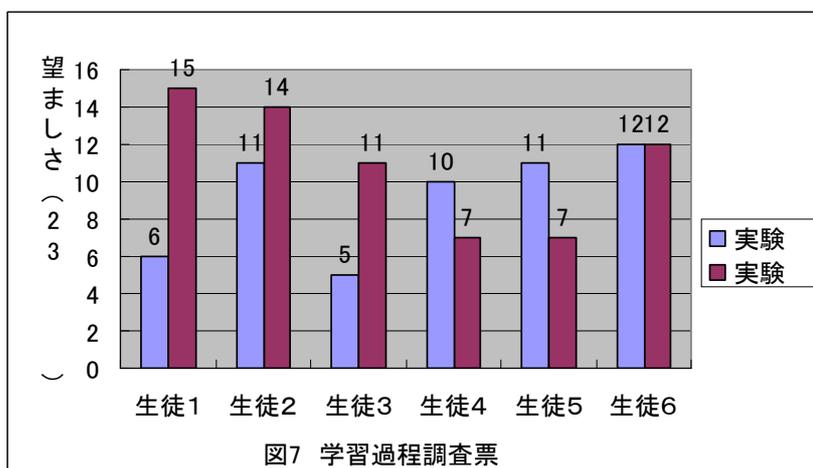
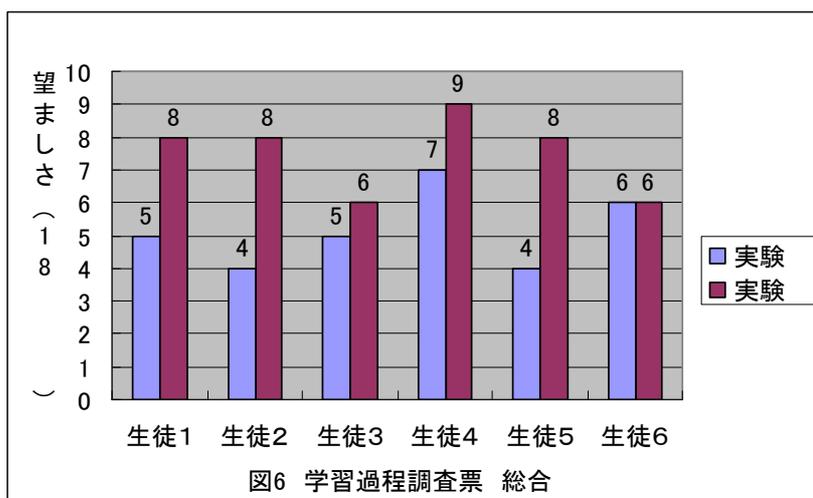


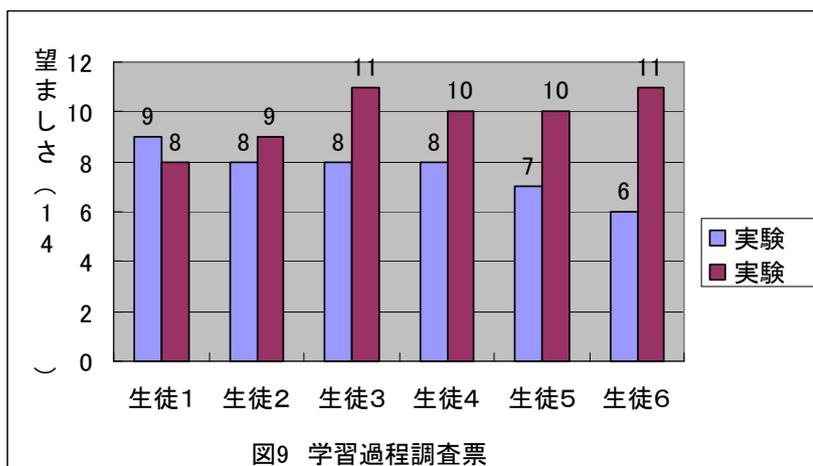


2. 学習過程調査票による生徒の傾向の変化

次に学習過程調査票から学習者の変化をみる。なお採点方法は、2件法でより望ましいとされる選択をした項目を1点、望ましくないとされる項目を0点としてそれぞれの合計を算出する。その結果を以下に示す（生徒1, 2, 3は実験群1、生徒4, 5, 6は実験群2である）。図5は、4つの下位尺度の得点を合計したものであり、学習過程に対する望ましさの程度を測っているものである。図5で示したように、実験前の事前調査（第0回）と比較すると、実験後は全員が望ましい学習傾向に変化している。さらに興味深いことに、実験群1と実験群2を比較すると、実験群1の方に、より高い数値の上昇がみえる。







実験群1と実験群2において「総合・分析」の観点からは両実験群ともに上昇の傾向をみせた(図6)。だが「事実の記憶」(図8)に関しては、個人間には差異が見られたが、実験群としての差異は見られなかった。注目したものが「勉強法」(図7)と「精緻化」(図9)の学習過程である。勉強法に関して両実験群を比較すると、実験群1の実験後の平均は13.3、実験群2の実験後の平均は8.6である。このことから方略を多く学習した実験群1は、より望ましい勉強法を修得したとかがえる。それではなぜ実験群2では実験後の方が低い数値を取るのだろうか。これには前述した市川の述べるように、方略を利用するに当たっての予備知識が未だ完全ではなく、利用が難しい状態になっており、実験群2においては導入した方略に対する試行錯誤が行われているものだと考えられる。だが、「精緻化」に関しては実験群2が大きな上昇をみせた。このことから推測すると、実験群2は教材に対してイメージを作ることや類似した概念がないかを考えるようになっているが、勉強法として精緻化を学習へ取り組めていないと考えられる。

この質問紙では、事前調査の段階から学習者の学習傾向を調査した。6人に共通した項目をまとめると以下の表2ようになった。

総合・分析に関する質問の「わかっていることをもとにして、まだわかっていないことを考えるのは難しいか」という問いには、方略教授後も教授前も「難しい」という回答であり、「答えが分からないとき、正しく推測できるか」という問いには「できない」という回答だった。方略を使えば、解答が予測出来る、解答が導き出せれば問題が解ける、問題が解ければ達成感から学習に対する意欲が増す、というようなものを考えていたが、そうではないということがわかった。

表2 学習傾向の変化の共通点

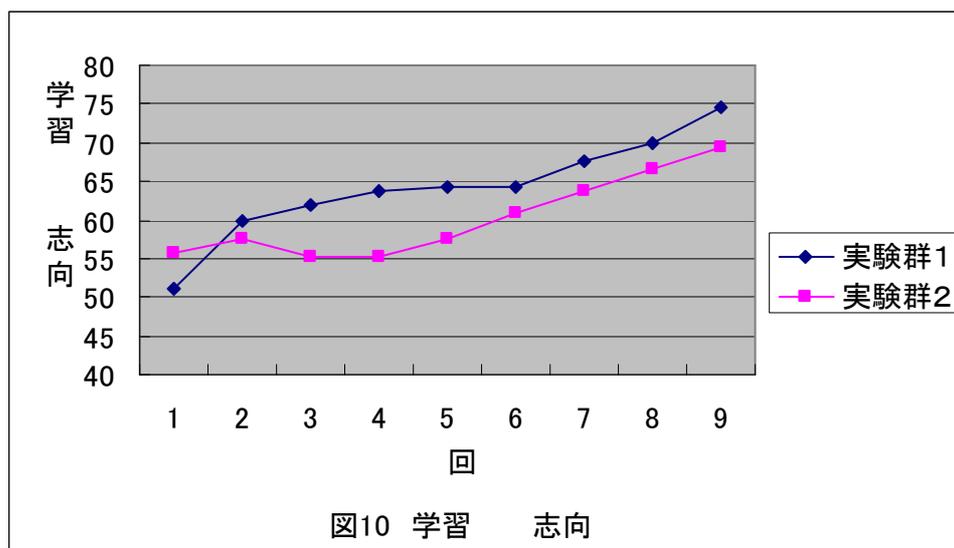
| 評価基準 | 事前調査 | 事後調査 |
|-------|--|--|
| 総合・分析 | 既知の知識を応用することは難しく考えるのが遅い。良し悪しや正誤などを考えずに勉強する傾向が高い。 | 既知の知識を応用することは難しいが、良し悪しや正誤などを意識して考えながら学習するようになった。 |
| 勉強法 | 勉強の計画や定期的な見直しなどしない。単語の理解を深めるための努力を行わない。学習やテスト勉強のときに、必要な言葉が教科書のどこにあるのかが分からない | 勉強の計画や定期的な見直しなどしない。だが、読んだ教科書の要点メモをとるようになった。教科書などに必要な語句がどこにあるかを見つけられるようになった。 |
| 事実の記憶 | 英単語の意味・スペルなどを覚えるのが苦手で非常に苦勞する。テストの時などは教科書やテキストなどをそのまま覚えるようにしている。 | 英単語の意味・スペルなどをおぼえるのは難しい。空欄を埋める、定義を述べるなどの試験ではよい結果が出せるようになった。 |
| 精緻化 | 事実の背後にある理由に興味がなく、新しい概念を教わったとき、それに似た概念を思い出せない。教材を読んだ後でしばらく考えようとする。新しい単語やアイデアを既に知っている物に結びつけて学習することもあるが、事実に対する法則性の発見や、新しい概念の応用については困難である。 | 事実の背後にある理由に全員が興味を示すようになった。教材を読んだ後でしばらく考えようとする。新しい単語やアイデアをすでに知っている物に結びつけて学習することもあり、類似のアイデアに結びつけて学習しようとする。 |

3. 学習方略の影響と受け止め方

「学習目標志向測度」の結果を、各目標志向から見た学習意欲ではなく、目標志向によらず学習意欲が上昇したかを見るために全ての志向を含めた学習目標志向測度から分析を行うこととした(図10)。指導回数と実験群要因の2要因の分散分析をおこなったところ、交互作用は認められず、回数の主効果が認められた。実験群1では、実験前と第1回目の指導との間で有意差が認められた($F=14.10, p<.05$)。実験群では、方略教授を導入した5回目と8回目の指導に有位差が認められた($F=5.35, p<.05$)。すなわち方略を教授したことで意欲が高まったということが確認できた。実験群1では、実験の初回から学習方略の存在、使用を教授し、その方法を認識させたことが速やかな学習意欲の上昇に影響していると考えられる。学習の第1回より提示されたことで、興味を刺激され、速やかに取り組めたと思われる。一方、実験群2には、方略を指導した5回目と次の6回目ではなく、8回目に有意差が認められた。この差は、実験群2が、前半4回の指導を従来の個人学習のように学習したことに問題があったと思われる。実験群2の生徒たちは、筆者の方略の指導が行われない前半は、いつもどおりに単純な反復学習を続けるのみで、「院生の家庭教師も特別なことはないんですね」、「期待外れな気がする」などの意見を出していた。このため、実際に5回目から学習方略を教授しようとしても、前半4回の指導によるネガティブなイメージがそれを妨害し、影響が出

るまでに時間がかかったと考える。このように、新しい学習法を提示されても、批判的な意識や自分には向かないと感じると、その学習法を選択しないという意見は Palmer, D.J. and Goetz, E.T.(1988)が述べており、今回の実験からもそれはうかがえるものであった。

本研究では、対象とする数が少ないので統計的な分析にかける有効性については検討の余地が残されるが、学習方略の導入が学習意欲の上昇に影響することは推測できるであろう。



また、学習方略を指導していると、実験群1の取り組みに変化が現れた。調査協力者たちは、前半4回目の授業までは精緻化方略を好んで使用していた。語呂合わせで覚えることや、英語漫画による効果として学習に取り組みやすくなるというものがある。その効果が現れたのだということがうかがえる。しかし、その学習態度は、生徒自身が取り組むというよりも、教授者の促しにより、方略を選択使用するというものであり、「どうやったらいいのですか」「語呂合わせで何かいいものはありますか」など尋ねてくるが多かった。これは、実験群2も同様で、方略の指導から「おもしろい」という感想や「こういう勉強なら楽だな」という意見はあったが、自分から課題にあわせたイメージをつくることには難色を示しているようであった。

だが、実験群1の後半5, 6回目の指導には、単語課題を提示すると、その構成はどうなっているのか、どこで分解できるかということに興味を示し、そこから意味を推測するようになった。さらに、精緻化方略に関しても、単語を日常の場面で見聞きした語に関連づけてイメージとして組み合わせることができるようになっていた (medicine : medical という言葉を病院で聞いたことがあり、medi という接頭辞が、医療に関するものであるということ推測。そこから薬品という意味にたどり着いた)。

また、図10を確認すると、5, 6回目の指導で、意欲がまた伸びている。これは、使用方略の変化と意欲の上昇に関係があると思われる。

考察

使用方略の変化と学習について

本研究の対象とした生徒6名のうちで実験群1の生徒3名には使用方略の変化がみえた。計8回の授業のうち、前半は精緻化方略が好まれ、生徒も自ら進んで図書館から英語漫画を借りてきたり、イメージと語呂合わせをつくっていたりした。しかし、後半5, 6回目の指導には、提示した単語課題を分解できないか、構成や語源はなにかと体制化方略を使用することが増えた。実験群2にはその変化がみえなかったが、学習方略を導入する際にはじめに選択した方略は、実験群1と同様に精緻化方略であった。

本研究の実験群1, 2の両方ともに、学習方略を導入した際にはじめに選択された方略は精緻化方略であった。そして精緻化方略によって学習を行い、語彙を増やしていく。そのなかで英単語に共通した接頭辞や語幹に気づき、体制化方略へと変化していくのではないだろうか。そして、図10で示されているように実験群1の学習者は、体制化方略へと変化を見せていると思われる5, 6回目の指導では再び志向性が上昇している。

方略の指導から意欲の上昇までの回数が数回かかったことなどは、生徒が外面的な方略の使用変化だけでなく、各々に見合った方略を用いることが出来るようになるまで時間がかかったと考えられる。

今後の課題

本研究では、「学習方略を他者から教授されても学習意欲は上昇し、それは体制化方略だけでなく、精緻化方略でも影響がある」という傾向を推測できる。同時に、「方略の教授は早い段階から与えるほど効果的である」ということ、「いくつかの方略を同時に提示しても学習者はそこから選択し、自分の学習スタイルの発展とともに使用方略を選択する」ということまで見ることができた。

これは、非常に有意義な結果であり、ゆとり教育が展開され教育現場での時間が減少し、学習意欲の上昇を求める現在の日本教育のなかで、有効な手段となり得るものである。

だが、本研究においては、英語に対する意欲、学習成績の低いものを選抜したためであったが、結果としてはわずかな人数での実験となり、多数への効果を検証できず、信頼性という点で疑問が出る。また、学習目標志向測度を用いる際に4件法でおこない、生徒の意欲の上昇を細かく測ることができなかったという点で懸念も残る。

学校という学習現場での多人数を対象とした学習方略教授はどのように行えばよいか、それによる学習意欲の上昇はみられるか。現在の生徒の学習意欲の現状を調査し、どのような方略を使用する生徒が意欲が高いのか。Deci (1995) の述べたテスト予期による学習意欲の変化の観点から、テスト形式や単純な点数評価ではない生徒の学習態度の変化を捉えた分析をする必要もある。

今後、これらの問題に対処して成果を出していくことで、学習方略の学習意欲に対する効果の一般化を検討していきたい。

引用・参考文献

- Atkinson, J.W. 1957. Motivational determinants of risk-taking behavior. *Psychological Review*, 64, 359-372.
- Bandura, A. 1977. Self-efficacy : toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bandura, A. 1982. Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37, 122-147
- Deci, E.L. & Flaste, R. 1995. *Why we do what we do: The dynamics of personal autonomy*. (桜井茂樹監訳. 1999. 『人を伸ばす力～内発と自律のすすめ～』 新曜社)
- 古川昭夫・宮下いづみ. 2008 『MANGA で楽しく英語を学ぶ』 10-15 (小学館)
- 辰野千壽. 1997. 『学習方略の心理学 賢い学習者の育て方』 (図書文化社)
- 市川伸一 1998. 『認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導』 95-115.(ブレーン出版)
- Levin, J. R. Pressley, M. Delaney, H.D. 1982. The Mnemonic Keyword Method. *Review of Educational Research*, 52, 61-91.
- Nation, I.S.P. 1990 Learner strategies. In I.S.P. Nation, *Teaching and Learning vocabulary*. Boston,; Heinle & Heinle Publishers. pp.159-179.
- 岡田いづみ. 2007. 「学習方略の教授と学習意欲—高校生を対象とした英単語教育について—」『教育心理学研究』 55, 287-299.
- Palmer, D.J. and Goetz, E.T. 1988 Selection and use of study strategies : The role of the student's beliefs about self and strategies. *Learning and strategies*. Academic Press
- Pintrich, P.R., Smith, D.A.F., Garcia, T., & McKeachie, W.J. 1993. Reliability and predictive validity of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ). *Educational and Psychological Measurement*. 53, pp.801-813.
- Reese, H.W. 1976 Basic learning processes in childhood. *Holt, Rinehart and Winston*
- Schmeck, R.R., Ribich, F. and Ramanaiah, N. 1977. Development of a self-report inventory for assessing individual differences in learning processes. *Applied Psychological Measurement*. 1, 413-431
- 清水建二. 2003. 『語源とイラストで一気に覚える英単語』 (明日香出版社)
- 谷島弘仁・新井邦二郎 1994 「学習の目標志向の発達の検討および学業達成との関連」『筑波大学心理学研究』 16, 163-173
- TKO プロジェクト. 1996. 『ゴロ合わせ 合格英単 V ワード・基本編』 (中経出版)
- Wolters, C.A. 1998. Self-regulated learning and college students' regulation of motivation. *Journal of Educational Psychology*. 90, pp.224-235.